

2014.05.19 掲載

「患者目線で闘病つづる 市立伊丹病院 車いすの看護師」

看護師:安達千代美

早 (夕刊)

【朝夕刊月ぎめ定価 4037 円 (本体価格 3738 円 + 消費税 299 円)】 1 部売り朝刊 130 円・夕刊 50 円

(第 3 種郵便物認可)

市立伊丹病院「車いすの看護師」

患者目線で闘病つづる

厚生労働省指定の特定疾患「多発性硬化症」で一時寝たきりになりながらも、懸命なりハビリで医療現場に復帰した伊丹市立伊丹病院の看護師安達千代美さん(49)がつづった体験記が、日本看護協会のコンクール「忘れられない看護エピソード」で、最優秀賞に次ぐ、内館牧子賞に輝いた。(太中麻美)

体験記が受賞

1996年、勤務中に突然視界が暗くなり、右目が見えなくなつた。医師から、脳や視神経に線り返し炎症が起きる多発性硬化症と診断された。何とか看護師を続けたいが、98年、脚に力が入らなくなり入院。体の自由が利かなくなり、一時は首が据わらず寝たきり状態になるなど、病院で8カ月間を過



退院調整看護師として、車いすで勤務する安達千代美さん
伊丹市立伊丹病院

寝たきり状態から現場復帰

いした。

「歩けないという感覚が理解できず、ベッドから何度も落ちた」と安達さん。看護師から「勝手に動かないで」「何で呼んでくれなかったの」と言われるたび、悔しさで申し訳なきが募った。

一方で、入院中に見聞きた看護師たちの姿や言葉が、復帰に向けた心の支えになった。

ベッドから落ちた時、抱きかかえながら「ごめんね、つらかったね」といたわってくれた。母親が病室の外で声を押し殺して泣いていると、そばに寄り添ってくれたという。「自分ならできるだろうか」。看護師としての言動を日々振り返っていることに気付いた。

退院後は在宅医療や訪問看護を受けながらのリハビリ。3年の休職を経て、車いすで現場復帰した。患者の在宅療養や往診などが円滑に進むよう、医師やケアマネジャーなどと連携する「退院調整看護師」として勤務する。

安達さんは体験記の最後をこう締めくくる。「歩けない看護師なんて『そういう批判も耳にしたが、病気を経験したからこそ分かる(患者さんの)不安や焦り、いらだち、喜びがある」